



## ほしい暮らしは 自分たちの手でつくる。

織戸龍也 [44期]



織戸龍也 | Tatsuya Oribe

暮らし探求家/コミュニティマネージャー  
2011年武蔵野美術大学建築学科卒業。建築設計事務所などを経て、現在は株式会社岩淵家守舎 代表取締役。Oriage(オリアージュ)代表。自らまちづくりの舞台に立ち、「まちが家族のように」をスローガンに東京都北区若淵町で住民主体のまちづくりを実践すると共に、店舗や住宅の設計・リノベーションなどを行う。そのほか、「グリーンズビープルサミット」、「働き方見本市U30」への登壇をはじめ、「頂点クリエイティブコンペティション」の審査員を務めるなど、幅広い活動を展開。  
[co-toiro] シェアキッチン&コワーキング  
<http://www.cotoiro.com/>

江戸時代、不動産管理やまちのエリアマネジメントなどをしていた「家守(やもり)」。その現代版となる、リノベーションを基軸としたまちづくりに取り組む家守会社を設立された経緯を教えてくださいませんか？

大学卒業後、約5年ほど建築設計事務所に勤めていました。それで独立を考え始めて、そろそろ個人の実績もほしいなと思い、住総研主催のリノベーションコンペに参加したのが全ての始まりですね。2LDKの団地をリノベーションするという課題で、僕は2LDKを3LDKにしシェアハウスにして住むという提案をしたんですが、「シェア」という形態を募集の対象外にさせていただきたいという連絡をいただきました。納得がいかないので、主催者に提案主旨と熱い思いを記したメールを送ったところ、2次審査に進んで、審査員に向けてプレゼンをすることになりました。それで、審査員にいた大家さんで有名な青木純さんが面白くなって、特別賞を受賞しました。その後、青木さんが管理するロイヤルアネックスという物件を紹介してもらい、その1室をセルフリノベーションさせてもらうことになったんです。

賃貸だと隣にどんな人が住んでいるか知らないなんていう話をよく耳にしますが、青木さんが管理する賃貸はそれとは真逆の世界なんですか？

まさに！ロイヤルアネックスは全員が知り合いみたいな感じですね。そのコミュニティに入った途端、青木さんが家庭訪問をしながら入居者を紹介しつつ、各部屋のリノベーションを見学させてくださって。ほかにも、初日に自分の部屋を工事していたら下の階の人が「工事してるの？うちに泊まっていけば？」って言うてくれて、初日から初めて出会った人の家に宿泊することになったりして、普通のマンションでは考えられないことの連続で衝撃を受けました。しかも下の階の人がリノベーションスクール(\*)@豊島区に参加していて、そのときの講師が青木さんで、ひょんなことから「見学者」という肩書きで僕も飛び入り参加することになったんです。その中で青木さんが言っ

た「人が主役で住んでいる家があって、家がどこにあるのって言ったら町にあるんだから、町に住むことを考えないといけないんだよ」って言葉が印象的で、そこから自分も、家の空間から町に対してどうやって人が住むかっていうところに視点がシフトしていきま

した。今振り返ってみても、ロイヤルアネックスでは、本当に大きな影響だったと思います。ロイヤルアネックスでは、住人同士と一緒に流しうめんなどをやったり、自宅をDIYしていると他の住人が見に来て「うちも直して欲しいんだけど」ってなって、ドアの施工をしたり、家具の設計とか取り付けをしたりして、いつの間にか僕はマンション内の工務店みたいになっていました。

それはお駄賃をもらってやるんですか？

ケースバイケースですね。実際にそれがきっかけで仕事をもらったりとかもしています。「友達がお店を出そうとしているんだけど、設計してみない？」という話をもらったこともあって、その中で独立の道が鮮明になっていきましたね。それと同時に、今度は見学者ではなく、参加者としてリノベーションスクール@都電・東京に参加して、最終プレゼンの時に300人超の観衆の前で、赤羽岩淵で家守(会社)としてエリアマネジメントしていくことを宣言しちゃって(笑)。その流れで、株式会社岩淵家守舎を設立しました。

勢いがありますね(笑)。具体的に、家守会社とはどういったもので、何をしているのでしょうか？

私見ですが、生活してる人たちの目線でまちづくりをするのが家守会社だと思っています。自分たちがそのエリアに住み、その中でどういう豊かな暮らしがしたいか(出来るか)を探り、実行したり、働きかけたりしていく。その積み重ねでエリアの価値を向上させて、まちの活気をつくっていくのが僕(家守)の仕事だと考えています。今は、長期的な計画の第一段階として、住居、シェアキッチン、コワーキングスペースを

兼ね備えた住宅群[co-toiro]を作りました。自分がいいなと思ったロイヤルアネックスのコミュニティはマンション内のもの。それをまちに——平面に点をさせていって、「まち全体が家族」になったらいいなという思いがあって、それを実現させるために日々楽しく奮闘しています。

[co-toiro]の手応えはどうですか？

建物自体が特徴的なものもあってか、竣工前から近隣住民からは「ここに何が出来るの？」という興味を持ってもらえました。特にシェアキッチンという空間が出来るといってはとて好評でした。実際、オープンしてから母子連れのお母さんたちが利用するなどして、今までの赤羽岩淵になかった賑わいの光景が生まれているということに確かな手応えを感じています。

今後の展開があれば教えてください。

次の展開としては、「co-toiro」周辺には飲食店がないので、賛同してくれる仲間を募りながら、飲食店の誘致などを行なっていけば、赤羽岩淵の歴史や文化体験を織り交ぜた簡易民泊やツーリズムなども展開していこうと考えています。また、数分歩けば隅田川・荒川の土手に出れる立地なので、水辺のポテンシャルを活かしたエリアマネジメントも画策中です！

\*遊休不動産などの再生を通じて、まちでの新しいビジネスを生み出しエリアを再生する実践的なまちづくりのプログラム。



[co-toiro]の住居部分、「コイロの家」。

## よそ者の視点から 魅力的な地域の在り方を探る。

井上 岳 [47期]

ムサビ在学中に参加した「アートサイト八郷」をきっかけに、私と茨城県石岡市との関係が始まりました。初めは出展作家として参加。その後同イベントの代表に就任し、卒業制作も石岡市で制作しました。大学卒業後は大阪の大学院に進学。うっすらと石岡市で働くことを考えていた矢先、同市で地域おこし協力隊の募集が始まり、ムサビの同期4人で応募し、「観光交流」「中心市街地活性化」「移住定住」「農林業」の各分野で採用していただきました。

石岡市の地域おこし協力隊は、活動の詳細な内容から提案することが出来るので、自分たちが常々考えていたことを実現できるチャンスだと感じました。その1つが、石岡市に現存する“看板建築群の活用”です。現在はその多くがシャッターを下ろしてしまっているものの、よそから来た自分たちにとっては、まともな看板建築が残っている光景は大変貴重なものに感じられました。

一方で、地元の人たちに話を聞いてみると、看板建築への関心はそれ程高くはないことも分かりました。そこで、看板建築の空間利用を始める前に、まずは地元の人たちに看板建築をより身近な魅力ある資源として再認識してもらうため、「マイ看板建築トートバッグを作ろう」というワークショップを企画しました。同イベントは、地元石岡の看板建築の一部をスタンプにして、それを組み合わせてトートバッグに押し、自分だけの看板建築トートバッグを作るというもの。地元商店街のお祭りに合わせてブースを出展し、延べ100人以上の地元のお客さんにオリジナルのトートバッグを作ってもらいました。

ワークショップを通じて、看板建築の店主の方々とも話しする機会に恵まれ、その中で看板建築が石岡市のハード面の魅力として十分誇れるものであ



上・下:「マイ看板建築トートバッグを作ろう」ワークショップの様子。

るという認識を持ってもらうことができ、今後看板建築を建築空間として活用することへの弾みとなりました。また、どこの地域にも言えることだと思いますが、地元の人にとっての当たり前が、外の人間にとってはとても魅力的に映ることが多々あります。そして、それらのもは外の人間に評価されることで、地元の人たちの誇りとなっていくものだと考えています。まだ始まったばかりではありますが、今後も看板建築を基軸に計画を走らせつつ、「よそ者の視点から魅力的な地域の在り方」を探り続けていきたいと思っています。

井上 岳 | Inoue Gaku

茨城県石岡市 地域おこし協力隊

1991年名古屋生まれ。2014年武蔵野美術大学建築学科卒業。在学中より武蔵野美術大学学生有志のアートイベント「アートサイト八郷」の代表を務め、石岡市と交流を深める。大阪市立大学大学院を修了後、2017年6月より茨城県石岡市地域おこし協力隊に兼任。

## 2017年度日月会企画イベントの報告

4月22日 | フォルマフォロ・セミナー第13回「まちの使いこなし方をデザインする——リノベーションという手法」

大島芳彦 [27期]/ブルースタジオ 専務取締役

対談:小津誠一 [23期]/有限会社E.N.N. 代表  
司会進行:鈴木 明 [10期]/武蔵野美術大学教授

リノベーションという手法を用いた建物の再生やまちづくりで活躍する大島芳彦さんを招き、豊富な事例をデータと共に紹介していただきました。また、後半では、日月会新会長の小津誠一さんと対談を開催。大学時代から親交のあるお二人による、学生時代から現在に至るまでのさまざまなお話などが繰り広げられました。

7月8日 | 日月会 建築賞

太陽賞:「ART SQUARE」松下峰大

満月賞:「Fragmental nostalgia」ドロア・ブランク

新月賞:「TUTUTU」渡辺大輝

三月賞:「Formed from Form」磯野 信

七夕賞:「…」渡邊昌平

## ご挨拶

日月会会員の皆様におかれましては、それぞれのフィールドで益々ご活躍の事を拝察いたします。酒向前会長より推奨いただき執行部会の承認を経て、昨年4月から日月会の会長を務めさせていただくこととなった第23期卒業の小津誠一です。私の活動については、本誌Vol.17のTOPICSのコーナーで掲載させていただいているのでここでは割愛しますが、現在は石川県金沢市を拠点に置きながら各地で建築設計やまちづくりなどに携わっています。ムサビ建築学科を卒業した3,500名を超える日月会会員は海外を含む各地で活動されており、本会においても全国型の同窓会として活動の幅を広げべく拝命いただきました。

酒向前会長をはじめ、代々の会長、執行部会が築かれてこられた日月会の理念や各事業を引き継ぎつつ、新執行部会メンバーと共に、日月会の更なる発展のために微力ながら尽力する所存でございます。皆様のご支援、ご協力と積極的な参加をお願い申し上げます。

石井大吾 Ishii Daigo

事務局長 [37期]

審査委員長:中村文美 [32期]/もば建築文化研究所 副代表、ほか

審査委員:

迎川利夫 [10期]/羽羽建設株式会社 常務取締役

遠藤治郎 [24期]/フェスティバルデザイナー

小澤祐二 [40期]/ピークスタジオ一級建築士事務所 共同代表

佐藤仁美 [46期]/アーティスト

10月7日 | 日月会 夜塾

「夜塾 Vol.0」

これまで芸術祭期間に開催していた「ホームカミングデイ」に代わり、日月会の新企画、「日月会夜塾」が始動。卒業生や学生がフラットな目線で車座となり、食事やお酒を交えながら、建築をはじめとした、仕事や暮らしなど、多岐にわたる話題を語り合う場として企画されました。初回は、プレイベントとして「夜塾 Vol.0」と題し、日月会新会長の小津誠一さんの東京オフィスRENNbidg.にて開催。建築設計のほか、飲食や不動産にも関わり、東京と金沢という2つの都市の拠点を歩き来して活動されている小津誠一さんに話題を提供いただき、熱い議論が企画タイトルの通り夜遅くまで交わされました。

## ご挨拶

さて、昨年の日月会では、建築リノベーションの第一人者でもある大島芳彦さん(27期)に登壇いただいたフォルマフォロセミナー、中村文美さん(32期)をはじめとした日月会会員5名の審査員を招いて開催した日月会建築賞、第二回長尾重武賞も昨年末に受賞作品が選定されました。その他、校友会総会行事への参加、進路相談会、ほぼ月例の執行部会なども滞りなく開催いたしました。

また、新たな企画として日月会夜塾を開催。卒業生会員や現役学生が、建築や仕事のことなどを本音で語り合う場として企画しました。今回は第0回として、私自身の地方を拠点とした仕事やムサ美卒業後の経緯などをお話しさせていただき、現役学生を含む約20名が語り合う有意義な機会となりました。

今年もこれらの各事業活動を行いながら、更に地方への展開も視野に入れた日月会活動を進めていきたいと思っています。今年も日月会へのますますのご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。



「日月会建築賞」受賞者・審査委員による記念撮影。



「夜塾 Vol.0」懇親会の様子。

「表紙写真」

co-toiro主催のイベント「廃材を使って夏休みの宿題DIY」。私道を使って、大人も子どもも夢中に工作する。

「編集後記」

今号では、前任の編集担当・尾内志帆さんが本誌Vol.13の時に企画した特集の続編を掲載しました。ムサビケンテックの先輩や後輩、同期の仲間たちが、どのような本を読み、自身の「建築」をつくっていったのかをぜひ読んでみてください！さまざまな年代のさまざまな職能の方たちが読んだ本から、何かの気づきや新たな出会いが生まれれば嬉しい限りです。[J]

編集:瀬澤純希

デザイン:小田権史

印刷:株式会社山田写真製版所

発行:武蔵野美術大学建築学科

同窓会・日月会

<http://www.nichigetsukai.com>

東京都小平市小川町1-736

武蔵野美術大学建築学科研究室内

# Forma-Foro

18 フォルマ・フォロ | 武蔵野美術大学建築学科・日月会  
MAR.1.2018 | VOL.18

